

# 俊頼髓腦所収和歌本文札記

岡崎 真紀子

\*

源俊頼の歌字書『俊頼髓腦』には、三代集から『萬葉集』『伊勢物語』その他、さまざまな歌集・物語に見える和歌が収められている。それらの和歌の本文は、まず『俊頼髓腦』自体の諸伝本の間で異同があることが少なくない。また、『俊頼髓腦』所掲の歌形が、諸歌集に伝わる歌の本文どおりであることもあれば、一致しない異文である場合もあり、それが『俊頼髓腦』諸本間の異同と絡み合っており、多様なパターンの事例となっている。本文の状況は入り組んでいると言っている。

そうした本文のゆれには、『俊頼髓腦』を書写する際に生じた誤写・誤記、または書写における改訂に由来するもの、あるいは溯って筆者俊頼自身の誤記、筆者の混同や思い違いに端を発するものというように、それぞれ背景があると考えられる。現在、写本として伝わる『俊頼髓腦』は、そのようにさまざまな段階で生じた本文の変成・転化を包含しているものではないだろうか。

現存する『俊頼髓腦』の伝本は、いずれも近世以降に書写されたものである。つまり、多くの写し手たちによって書写や転写が繰り返されたものが、今のかたちだということになる。そのような写本に伝わる歌の本文というのは、いったいどのような様相を呈しているのか。以下述べるものは、『俊頼髓腦』所収和歌の本文について留意すべきことを考察したささやかな試みである。

まず『俊頼髓腦』については十三種の伝本を検じた。そのうえで、歌集などに掲げられた歌の本文と比較してゆくことにする。はじめにいくつかの事例を取り上げ、本稿末尾に『俊頼髓腦』所収和歌本文一覽(抄)をあげた。

## 一、『俊頼髓腦』の書写において生じる誤写の場合

300 b 君が世はつきじとぞみる秋風やみもすそ河のすまんかぎり  
は

右の歌は、「神風」をめぐる例歌として、300番歌「神風や伊勢のまをぎをりふせてたびねやすらんあらきはまべに」と並べて掲げられている。第三句は、静嘉堂本と《略本》(全)に「秋風や」とあるが、『俊頼髓腦』の他の伝本は「神風や」とする。国会本がこの歌を欠くのは、伝来の過程で生じた脱落だろう。この歌は、『後拾遺集』所収の源経信詠「きみがよはつきじとぞおもふ神風やみもすそがはのすまむかぎりは」<sup>(3)</sup>を掲出したもの。「秋風や」という本文は、経信歌の引用として適切ではなく、「神風」を話題にしている『俊頼髓腦』の文脈においても正しくない。これは、『俊頼髓腦』の伝本を写す段階で生じた誤写であろう。「神」と「秋」はくずした字体がやや類似するため、意図せぬ誤りが引き起こされたのだと思われる。

また、静嘉堂本300b番歌の「秋」の傍に「本」と補記があるのは、「秋風や」という誤った本文が静嘉堂本以前に既に生じていたことを示す。一方、歌に続く地の文を見ると、「神風（秋）といへるはふくかぜにはあらず」としるされている。静嘉堂本の写し手は、「秋風や」という和歌の本文に疑いを持ったが、ここはもとのまま書写し、地の文では「秋風」を「神風」<sup>(5)</sup>と書き改めたのである。つまり和歌と地の文とは、書写において本文に臨む意識が異なるわけである。こうしたことは、『俊頼髓腦』諸本における別の箇所でも見られる。この「秋風や」の場合のように、和歌だけをもとのまま書写したらしい所もあれば、逆に、和歌の本文のみ私意に改めたために地の文と噛み合わない歌形が伝わったと思われる場合もある。これ

は一般に、『俊頼髓腦』のように和歌の引用を多く含む書物の写本において、往々にして見られる書写の態度として念頭においておくべきであろう。

## 二、『俊頼髓腦』の書写において生じる誤記の場合

300b番歌の「秋風や」は、歌が掲出された文脈に関わりなく殆ど写し手の無意識のうちに生じた誤写だとすれば、次の異文の例は、もう少し違う事情が背景にあると言えるのかもしれない。

302 はなかたみ（花）めならぶ人のあまたあればわすられぬらんかずならぬ身は

静嘉堂本・久邇宮本・唯独自見抄は初句「はなかたみ」、国会本・《略本》(全)は「はなかつみ」とする。この歌は、『古今集』恋五・七五四番歌を引用したものである。『古今集』諸写本の本文はすべて「はなかたみ」(『古今六帖』も同形)となっており、「はなかつみ」は無い。「はなかたみ」は、花を摘み入れる籠をいう花籠（はなかたみ）のことで、籠の編み目が並ぶという意で第二句の「めならぶ」に懸かる枕詞である。「はなかつみ」という本文ではその表現が成り立たない。

それでは『俊頼髓腦』のある伝本にあらわれる「はなかつみ」という歌形をどう考えればよいのだろうか。『俊頼髓腦』は302番歌の前に、301番歌「みちのくのあさかのぬまのはなかつみかつみるひとのこひしきやなぞ」(諸本異同なし)をあげ、「かつみといふは、こ

もをいふなり」以下、「かつみ」についての注釈を述べている。続いてこの302番歌を示し、「これは花などつみいゝ籠なめり。…はじめの歌にまぎるればかきて候なり」と解説する。ここで『俊頼髓脳』は、植物の薦をいう「はなかつみ」と、花籠をいう「はなかつみ」との区別を述べていることがわかるだろう。そして302番歌は後者の歌例である。このような文脈を考えると、『俊頼髓脳』302番歌のあるべき本文は「はなかつみ」であった可能性が極めて高い。また、俊頼の詠んだ和歌の実作では、「はなかつみ」「はなかつみ」が明確に使い分けられている。例えば『散木奇歌集』の「鳴のある玉江に生ふる花かつみかつみながら知らぬなりけり」(一三七〇)は「はなかつみ」を詠んだ例、「我妹子が花のたもとをかたみ(筐・形見)にて摘める董を心して見よ」(一五九、『堀河百首』所収)は「はなかつみ」を詠んだ歌である。このことから、筆者俊頼自身が『俊頼髓脳』を書くとき両者を取り違えて記述したとは考えにくい。したがって302番歌の初句を「はなかつみ」と伝える本文は、書写において生じた誤りからくるものと考えられるだろう。書写の際ある写し手が、前に薦をいう「はなかつみ」について書いてきたことに引かれて、続く302番歌も「はなかつみ」のことだと思い違ひてしまったのだろう。いわば前出の語句に引かれた誤った理解からくる誤記と言わべきものである。それによって、「はなかつみめならぶ人のあまたあれば…」といった、古今集歌の引用としても『俊頼髓脳』自体の本文としても正当ではない歌形が生じた。それが国会本・《略本》(全志)という異なる系統の複数の伝本に共通して見ら

れることから、この誤記の生じた段階はある程度溯れるのではないかと想定されてくる。それが、そのまま『俊頼髓脳』の本文として後の伝本に継承されていったのだと思われる。

### 三、書写における本文の改訂

431 あらたまのとしのやとせをまちわびてたごよひこそにのみまくれすれ

これは、いせものがたりの歌なり。…(中略)…おこのあなかへゆきにけるをよるひるまちけれども、をともせで、やとせになりなければ、…

右の431番歌は、『伊勢物語』第二十三段の歌を掲げたものである。『俊頼髓脳』は「いせものがたり」と歌の出典を明示しているが、その本文は、伊勢物語歌ならば第二句「としのみとせ」とあるべきところを「としのやとせ」とする。地の文も和歌と同様で、男が去ってから戻るまでの期間を「やとせ」であると解説している。諸本を検すると、見得た伝本のうち殆ど(顯・国・久・略(口・光・九・内・鷹・無・池)が、歌の本文・地の文とも異同なく「やとせ」としていることから、『俊頼髓脳』がもともと、「としのやとせ」という本文を持っていた可能性が高い。俊頼はこの歌を、『伊勢物語』本来とはずれたかたちで理解していたようである。

ただ『俊頼髓脳』諸本の中で、唯独自見抄の本文は、この431番歌を「としのみとせ」として掲げている。これは、書写において『俊

頼髓腦』の本文が、『伊勢物語』所掲の歌形に書き改められたものだと思われる。「としのやとせ」では、この歌の引用としてはおかしいと疑念を抱いた写し手が、本文に手を加えたのだらう。書写にあたり写し手は、本文を「私意によって改訂」し、「原作者自ら犯した誤謬を訂正」(池田亀鑑『古典の批判的処置に関する研究』)しようとするところがある。だから現存伝本の本文が、歌集・物語に掲げられるような通行の歌形と一致するからと言って、それが『俊頼髓腦』の本文としてあるべき形だとはかぎらないことになる。

#### 四、諸本の性格との関連

右の41番歌「としのやとせ」の事例は、『俊頼髓腦』所収の歌形がもともと伊勢物語の本文と異なっていたらしいのだが、唯独自見抄においては一致するという場合であった。『俊頼髓腦』伝本を検討すると、これと同じような傾向が唯独自見抄には窺えるという場合がいくつもある。例えば、14番歌「たのめこしことのはいまはかへしてんほどなきみにはおきどころなし」や、360番歌「わぎもこがくべきよひなりさくがにのくものふるまひかねてしるしも」においてもそれぞれ、唯独自見抄では『古今集』の本文と同じ「わがみふるれば」「わがせこが」の形を伝えている(本稿末尾「一覽」参照)。また、414番歌「あひみぬもうきもつらきもから衣思ひしらずもとくるひもかな」においては、唯独自見抄と国会本・久邇宮本が、『古今集』と一致する「うきもわがみの」の形で掲出する(本稿末

尾「一覽」参照)。こうした事例はほかにもあるが、これらの事例を個々にどう考えるべきかというのを、いま性急に判断することは避ける。ただこのように、所収和歌において歌集の本文と同じ歌形が比較的現れる傾向が見られることは、唯独自見抄という伝本の持つ一つの性格として注意されることだらう。

また、これまでいくつかの例を見てきたように、『俊頼髓腦』が書写される間に本文の異同が生じた背景には、それぞれの所収和歌によってさまざまな要因が考えられる。それらの本文分化がいつごろ、どの段階で生じたかということも、決めがたい状況であることも窺い得たのではないだろうか。

北村(赤瀬)知子氏は、例えば、161番歌「しら雲にはねうちかはしとぶ雁のかげさへみゆるあきのよの月」や、194番歌「かきくらす心のやみにまどひにきゆめうつ」とはよひとさだめよ」における『俊頼髓腦』諸本間の異同(本稿末尾「一覽」参照)を取り上げ、地の文における俊頼説と一致しない歌形(「かずさく」、「こよひ」)が国会本に伝わることに注目され、それを藤原定家の説が反映した本文の改変と見て、国会本を「定家本」と捉え得る根拠として示された(注1所掲論文)。しかし、そうした所収和歌における本文異同は、『俊頼髓腦』が繰り返し書写されて今に至る、いつの時点でも起こり得たものではないだろうか。結局のところ、現存伝本における本文の内部徴証から、いわゆる「定家本」「顕昭本」の問題まで立証するのはそう簡単ではないのかもしれない。

## 五、俊頼自身において生じた異文

41 番歌「あらたまのとしのやとせをまちわびて」のように、『俊頼髓脳』がそもそも歌集の本文と異なる歌形を掲げていたと思われる例は少なくない。例えば、「心をさきとしてことばをもとめざる歌」として掲げられた次の歌などは、その一つである。

112 吹風にあつらへつくるものならばこのひとえだはよきよといはまし

113 ふく風は花のあたりをよきてふけこゝろづからやうつろふとみん

113 番歌の初句は、国会本にミセケチがあるほかは諸本に異同がないので、『俊頼髓脳』がはじめから「ふく風は」の歌形を持っていたと考えられる。この歌は、『古今集』春下・八八番、藤原興風の歌と掲げたものだが、『古今集』諸伝本の本文では、初句が「春風は」となっている（『古今六帖』『興風集』等も同形）。「ふく風は」とは、『俊頼髓脳』の筆者が113 番歌を書くとき、直前に同じ「吹風」という初句をもつ112 番歌をしたことに引かれたため誤って生じた歌形ではないだろうか。それならばこれは、和歌を列挙して書くという行為が、期せずして誤記をひきおこしたのだということになる。そのほかにも、筆者俊頼の潜在的な記憶の混同や、思い違いなどによって、歌集の本文と一致しない歌形が『俊頼髓脳』に現れた場合もある。それについては、拙稿『俊頼髓脳』における和歌の享

受（『国語国文』六七卷一一号）でとくに焦点を当てて論じた。

## \*

『俊頼髓脳』所収和歌における本文について、いくつかの例をあげて検討を試みた。本文にゆれがある場合は、その歌形がなぜ生じたのかという背景がある。それは書写における誤写や改訂もあれば、筆者自身に溯る異文もあるというように、さまざまなレベルでの問題が考えられるのである。また、ここではあまり指摘できなかったが、現存伝本に存する異本注記がしめすような諸本間の接触によって、本文が混成していた可能性も考慮しなければならないだろう。これらのことに留意して、現在伝わっている本文のありようについて、個々に見てゆく必要があると思われるのである。

## 注

(1) 例えば、北村（赤題）知子氏「俊頼から頼昭・定家へ」『俊頼髓脳』をめぐって（『国語国文』五〇巻七号）は、『俊頼髓脳』所収和歌の本文に享受者による改変の跡が見られると指摘し、伝本の性格を位置づけようとした。また鳥井千佳子氏は、『俊頼髓脳』に引用された古今集歌の本文について検討されている（『俊頼髓脳』に引用された古今集の本文について）（『百舌鳥国文』三号）。

(2) 以下、『俊頼髓脳』の引用は、静嘉堂文库蔵「無名抄 俊頼」（静嘉堂文库蔵歌学資料集成マイクロフィルム）により、適宜句読点・濁点を付し、『新編国歌大観』に準じた歌番号を示した。見得た伝本十三種を示す略号は、本稿末尾にあげた『俊頼髓脳』所収和歌本文一覧（抄）の凡例に

- 示した。諸本分類は便宜、赤瀬知子氏『俊頼髓腦』における享受と諸本  
 「諸本論のための試論」(『国語国文』五〇巻七号)にしたがい、『広本』  
 と『略本』および「唯独自見抄」という名称を用いて整理した。なお、赤  
 瀬氏の説のあと伊倉史人氏による諸本分類もある(和歌文学会例会口頭  
 発表、平成七年五月)。両者は、分類した諸本群を系統づける考え方に違  
 いがあるが、本稿の検討においてはどちらの分類に従っても問題はない  
 と考える。
- (3) 和歌の引用は、本文上の問題がとくにないかぎり、便宜「新編国歌大  
 観」によった。ただし、それぞれの歌集についてできる限り諸本の異同  
 を検ずるよう努めた。その方針は、本稿末尾の「一覽」凡例に示したと  
 おりである。なお、300b歌の第二句(つきじとぞみる・つきじとぞおもふ)  
 の異同については本稿末尾「一覽」参照。
- (4) こうした注記は、静嘉堂本の写し手が初めて付けたものではなく、も  
 との本に既にあつたものが継承された可能性が高い。京都大学蔵「无名  
 抄 俊頼」にも同じ補記がある。なお、『俊頼髓腦』伝本における補記・  
 異本注記に着目したものに、今井優氏『俊秘抄』伝本諸本の原型推考  
 (大阪大学『語文』四八号)がある。
- (5) 「神風」の解説を述べた内容に適合する形への改訂である。
- (6) 「た」と「つ」は連綿体の字体が近似するため交替がおこりやすいこと  
 も、異文の生じた背景として考えられる。国会本の本文は「はなかつみ」  
 と読める字体であるが、それを『日本歌学大系』は「はなかつみ」、『日本  
 古典文学全集』は「はなかつみ」(校訂付記に言及なし)と翻刻する。
- (7) 静嘉堂本も「つ本」と補記があり、親本は「花かつみ」という本文を  
 もつていたことを示す。
- (8) 初句の異同については本稿末尾「一覽」参照。
- (9) ほかに『伊勢物語』は男が京へ帰ったという話であるところを、男  
 が「ゐなか」へ行つたとしているなど、『俊頼髓腦』の理解は、『伊勢物  
 語』第二十三段の本文とずれた点が見受けられる。
- (10) 『略本』の初雁文庫本も「としのみとせ」で、地の文も「みとせ」と  
 なっている。
- (11) 静嘉堂本「わかみふるれば」と傍記。
- (12) 唯独自見抄は、『俊頼髓腦』諸本のなかで独自の本文を有し、はやく頭  
 昭がそれに近い本文を見ていたのではないかという指摘(注2前掲、赤  
 瀬論文)もある伝本である。ただし、ここに指摘したような性格を考慮  
 すれば、本文の細部を扱うときには注意を要する場合があるだろう。な  
 お、宮内庁所蔵部蔵本「唯独自見抄」は現段階では未見であるが、『俊頼  
 髓腦』研究会編『唯独自見抄』(平成九年)付載の校異を参照した。ま  
 た、鈴木徳男氏「唯独自見抄の性格―異本俊頼髓腦について」(樋口芳  
 麻呂編『王朝和歌と史的展開』所収、平成九年)の論がある。
- (13) 久曾神昇氏「俊秘抄に就いて」(『国語と国文学』一六巻三号)岡田希雄  
 氏「久曾神氏の『俊秘抄』について」を讀む(『国語国文』九巻九号)以  
 来、国会本の位置づけは問題となってきた。なお、『俊頼髓腦』のいわゆ  
 る『広本』について扱った最近の論として、鈴木徳男氏『俊頼髓腦』(広  
 本)の性格(和歌文学会関西例会、平成九年十二月)がある。

## 『俊頼髓腦』所収和歌本文一覽(抄)

## 凡例

一、『俊頼髓腦』所収の和歌から本文上興味深いと思われる事例を取り上げ、必要に応じて『備考』を付した。  
 一、まず『俊頼髓腦』所収の和歌の本文を掲げ、\*以下に『俊頼髓腦』諸本間の異同を示し、▼以下にその歌を取める歌集と、『俊頼髓腦』の本文との異同を掲げた。歌番号は『新編国歌大観』に準ずる。◇は、『俊頼髓腦』所掲の歌形が特定の歌集には見出せないことを示すものである。「前稿」とは、拙稿『俊頼髓腦』における和歌の享受(『国語国文』六七卷一―号)を指す。

一、『俊頼髓腦』の底本は静嘉堂文庫蔵「無名抄」俊頼による。『俊頼髓腦』の伝本のうち十三本を校合し、諸本間の異同を検じた。見得た伝本とその略号は、次の通りである。

1	静嘉堂文庫蔵「無名抄」俊頼	頭	《広本》	7	内閣文庫蔵「俊秘抄」甲乙二本	内	〃
2	国立国会図書館蔵「俊頼髓腦」	国	〃	8	宮内庁書陵部蔵(鷹司本)「俊秘抄」	鷹	〃
3	久邇宮家旧蔵「無名抄」	久	〃	9	宮内庁書陵部蔵「俊頼無名抄」	無	〃
4	東京大学国文学研究室蔵「俊頼口伝」	口	略 《略本》	10	岡山大学池田家文庫蔵「俊頼無名抄」	池	〃
5	酒田市立光丘図書館蔵「俊秘抄」	光	〃	11	国文学研究資料館初雁文庫蔵「俊頼髓腦」	初	〃
6	九州大学図書館蔵「俊秘抄」	九	〃	12	島原市立公民館松平文庫蔵「唯獨自見抄」	唯(松)	〃
				13	彰考館文庫蔵「唯獨自見抄」	唯(彰)	〃

3は日比野浩信編『久邇宮家旧蔵本俊頼無名抄の研究』(未刊国文資料)に、5、8、9、10、13は、国文学研究資料館所蔵マイクロフィルムまたは紙焼写真本による。諸本分類の名称は赤瀬知子氏の論に準じた。

一、歌集等の本文は、掲出の際は便宜『新編国歌大観』を底本としたが、それぞれ次のものを参照し、諸伝本の本文を検じてある。  
 古今集は久曾神昇『古今和歌集成立論』、後撰集は大坂女子大学編『後撰和歌集総索引』、拾遺集・拾遺抄は片桐洋一『拾遺和歌集の研究校本編』『拾遺抄』、私家集は『私家集大成』、伊勢物語は池田亀鑑『伊勢物語に就きての研究』。歌学書類はおおむね便宜『日本歌学大系』によったが、袖中抄は後藤祥子・橋本不美男『袖中抄の校本と研究』による。

20 あきの野になまめきたてるをみなへしあなことくしはなもひとよき

\* 「かとくし」略(初)、他本「ことくし」

▼古今集・雑体1016(僧正へんぜう)

「ことくし」基俊本、後鳥羽院本、元永本。「かしかまし」(ふつうはあなことくし)六条家本、永治本、前田本、天理本。

「かしかまし」志賀須賀本、雅俗山庄本、右衛門切、寂恵本(書き入れあり)、雅経本、今城切、建久本、伊達本。

《備考》初の「かとくし」は転写時の誤記と思われるので、『俊頼髓腦』の歌形は「ことくし」。鳥井論文(本稿注1参照)に指摘がある。

49 山風にとくる氷のひまことにうちいつるなみやはるのはつ花

\* 傍線部異同なし

▼古今集・春上12(源まさずみ)

「やまかぜに」私稿本、基俊本、筋切本、元永本、雅俗山庄本、六条家本、永治本、前田本、天理本、建久本、高野切、

静嘉堂本(たにイ)。「たにかぜに」伝叔連筆本、伊達本。「たに(やま)かぜに」雅経本、永曆本、昭和切。

「たにかぜ(清ヤマカゼ俊ヤマカゼ)に」寂恵本。

寛平御時后宮歌合「谷風に」、新撰萬葉集・春歌239「谷風丹」、古今六帖・一・春立つ日5「やま風に」、金玉集・春5「谷風に」、

和漢朗詠集・早春16「たにかぜに」

《備考》『古今集』等の本文としてごく早い段階で「やまかぜに」「たにかぜに」の二通りが存したらしい。『俊頼髓腦』は「やまかぜに」を伝える。

53 いてわかこまはやくゆきませまつちやままつらんいもをはやゆきてみん

\* 傍線部異同なし

▼萬葉集・十二3154「乞吾駒」、古今六帖・五・いへとしをおもふ2987「いであがこまは」、和歌九品「我駒は」



恋しくはとふらひきませちはやふる三輪の山もとすきたてるかと

\*傍線部異同なし

▼古今集・雑上 982 「わが庵は三輪の山もと恋しくはとふらひきませ」、綺語抄、和歌童蒙抄、袋草紙

《備考》『古今集』所掲本文と異なる歌形。三輪山をめぐる歌語りに伴い口頭で歌が享受されるなかで、こうした歌形も生成されたものか。前稿V章において言及した。

あま雲のたちかぎなれるよはなればありとほしをば思ふへきかは

▼貫之集 830 「かきくもりあやめもしらぬおほ空にありとほしをば思ふべしやは」、

古今六帖・二・やしる 1081 「かきくもりあやめもしらぬおほぞらにありとほしをばいかがしるべき」、袋草紙

《備考》蟻通明神の前を通りかかった紀貫之が歌を詠んで許されたという説話とともに掲出された歌。『俊頼髓腦』の歌形は、歌集所掲本文と一致しない異文である。『貫之集』等所掲本文によれば、「大空にあり」と「蟻通」を掛けた表現だが、『俊頼髓腦』の歌形ではその掛詞がはたらかない。なお、『枕草子』等に蟻通明神をめぐる歌と説話に別形が伝わる。

かすふれとたまらぬものをとしといひてことしはいたくおひそしおひそしは上本にける

\* 「かすふれと」 頭・久、「かそふれは」 国・略(口・光・九・鷹・無・池・初)、「かそふれは(トイ)」 内、「かそふれと」 唯

「おひそしにける」 頭・国・久、「おひにけるかな」 略(全)・唯

「たまらぬ」 頭・久・唯・略(鷹・無・池)、「とまらぬ」 国・略(口・光・九・内)

▼古今集・雑上 893

「かそふれとたまらぬものを」 志香須賀本、基俊本、元永本、六条家本、寛親本、永治本、前田本、天理本、後鳥羽院本。

「かそふれは(ト)まらぬものを」 雅経本、「かそふれはとまらぬものを」 雅俗山庄本、民部切、永曆本、建久本、寂恵本、伊達本。

「おいにけるかな」 民部切、他本すべて「おいそしにける」

75

おしてるやなにはほりえにやくしほのからくもわれはおひにけるかな

\* 「なにはほりえに」 顯・國・久、「なにはみつはに」 略(口・光・無・池)、「なにはみつはに(ほりえい)」 九・内、

「なにはのみつに」 唯・鷹

▼古今集・雜上 894

《備考》74・75 番歌などについては拙稿「俊頼髓腦における古今集の享受―七叟の歌から尚齒会和歌へ」(『成城国文学』一四号)で取り上げた。『俊頼髓腦』はこの歌を七叟尚齒会和結びつけて理解している。なお、尚齒会をめぐる記事として、拙稿で挙げ得なかったものに「嘉保二年尚齒会のうた／はるにあひてやそぢぢちかくなりにける花見むこともことしばかりか」(『万代集・春下 334・高階経成朝臣]がある。この場を借りて付け加えたい(浅田徹氏の御教示による)。

94

しての山またみぬ道をあはれわか雪ふみわけてこえんとすらん

▼詞花集・雜下 361(良運法師)「おほつかなまだみぬ道をしての山雪ふみわけてこえむとすらむ」

105

なにはかたしほみちくれはかたをなみあしへをさしてたつなきわたる

\* 「なにはかた」 顯・國・久・略(九・内・無・池)「わかのうらに」 略(口・光・鷹) 唯、この歌を欠く。

▼萬葉集・六 919(山部赤人)、古今集・仮名序、古今六帖・六・つる 433、赤人集 115、352、忠岑十鉢・古歌鉢、道濟十鉢・古歌、

金玉集・雜 48、深窓秘抄・雜、前十五番歌合・十五番右、和漢朗詠集・鶴 451、諸歌集すべて「わかのうらに」。

《備考》「なにはがた」の本文は、右掲の赤人歌と「なにはがたしほみちくらし海人衣たみのゝしまにたつなきわたる」(古今集・雜歌上 913)を混同したものか。《略本》三本の「わかのうらに」は書写者による本文改訂の可能性が高い。前稿Ⅱ章において言及した。

112

吹風にあつらへつくるものならはこのひとえたはよきよといはまし

▼古今集・春下 99(よみ人しらず)、古今六帖・六・花 405、素性集 39「あとらへつくる」

113

ふく風は花のあたりをよきてふけこゝろつからやうつるふとみん

\*「春（ふくミセケチ）かせは」国、他本「ふくかせは」。唯、この歌を欠く。

▼古今集・春下85（ふぢはらのよしかげ）「はるかぜは」（諸本異同なし）。古今六帖・一・はるのかぜ381（諸本異同なし）、興風集1  
 《備考》前の112番歌の初句「吹風に」に引かれた誤記。本稿で取りあげた。

114 イをそく出る月にも有哉あし引の山のあなたもおしむへら也

\*国・略（全）・唯、この歌あり。久、この歌なし。

▼古今集・雜上877（よみ人しらず）、古今六帖・一・さふのつき337、新撰和歌・四287

115 春かすみたてるやいつこみよしのよしのよやまに雪はふりつゝ

\*「たゝる」国、「たてる」顯・久・略（全）・唯

▼古今集・春上3（よみ人しらず）、古今六帖・一・かすみ603、新撰和歌・一3、和漢朗詠集・霞78、教長古今集註、古来風跡抄、西行上人談抄

116 野辺ちかく家のしせれば鶯のなくなるこゑはあさなくきく

▼古今集・春上16（よみ人しらず）

117 おほそらをおほふはかりの袖もかなちりかふはなを風にまかせし

\*「ちりかふはなを」顯・国・久・略（鷹・無・池）・唯、「ちりかふはなを（春さくイ）」九・内、「春さく花を」略（口・光）

▼後撰集・春中64「春さく花を」天福本、堀河本、雲州本。「はるちるはなを」二荒山本、片仮名本。

寛平御時后宮歌合・春・右24「春咲く花を」、源氏積（書陵部藏「源氏物語注釈」所収「源氏或抄物」）「ちりかふ花を」  
 《備考》『俊頼髓腦』所掲「ちりかふはなを」は『後撰集』本文にはみられない歌形。『源氏積』一本に同形が伝わる。

120 そらにけふくれさらめや イキヤト おもへともたえぬは人のこゝろなりけり

\*「そへにけふ」国・略(口・光・九・内・無・池)・唯「そえにけふ」、「けふそへに」鷹  
 ▼後撰集・恋四882(あつただの朝臣)、敦忠集12、大和物語・九十二段、三十六人撰、諸本「けふそへに」。  
 《備考》「そへにととすればかよりかくすればあないひしらすあふさきるさに」(古今集・誹詠歌・1060)との混同か。前稿Ⅱ・Ⅲ章に  
 おいて言及した。

122

さくら花ちりかひまかへおひらくのこんといふなるみちまどふかに

\*「まかへ」頭・久・略(内・無・池)、「くもれ」略(口・光・九・鷹・初)・唯。国「まかへ」ヲ消シ「くもれイ」と傍記。

▼古今集・賀349(在原業平朝臣)

「まかへ」元永本、基俊本。「まかへ(くもれ)」雅俗山庄本、静嘉堂本。

「くもれ」私稿本、六条家本、永治本、天理本、寂恵本、伝寂連筆本、右衛門切、雅経本、永曆本、昭和切、建久本、伊達本。

伊勢物語・九十七段「くもれ」天福本、「まかへ」塗籠本系。

126

あすしらぬいのちなりともうらみおかんこのよまてのみやましとおもへは

\*「いのちならずも」鷹

▼拾遺集・恋二75(能宣)「わが身なりとも」。拾遺抄・恋314「いのちなりとも」流布本、「いのちなれとも」書陵部本、「わがみ(いのち朱)なりとも」貞和本。如意宝集・恋。能宣集211「いのちなれどもちかひおかむこのよとのみはおもはぬながら」

133

やましろのこはたの里にむまはあれときみをおもふはかちよりそくる

▼拾遺集・雜恋1243「山しなのこはたの里に馬はあれどかちよりそくる君を思へば」、古今六帖・二・くに1255「山城のこはたのもりに馬はあれどおもふあがためはあゆみてぞくる」、萬葉集・十一 2425

136

まてといふにたちもとまらしてしるてゆくこまのあしをれまへのたなはし

\*傍線部、諸本異同なし。

▼古今集・恋四739（よみ人しらず）「まてといはばねてもゆかなむ」、古今六帖・五・とどまらず3051「まてといはばねてもゆけかし」  
 《備考》歌集所掲の本文と一致しない異文。

137

うたゝねに恋しき人をゆめにみておきてさくるになきそわひしき

\*傍線部、諸本異同なし。

▼拾遺集・哀傷1302、拾遺抄・雑下562「うつくしと思ひしいもを」。人麿集Ⅱ577、萬葉集・十一2914、和歌童蒙抄

《備考》『俊頼髓腦』の歌形は、『小町集』の「うたゝねに恋しき人を見てしより夢てふ物はたのみそめてき」の上句と拾遺抄歌を取り混ぜたような歌形。『俊頼髓腦』筆者はこの二首を混同したかたちで憶え違っていたのであろうか。『和歌童蒙抄』第四・夢も『俊頼髓腦』と同形の歌を掲げる。

138

まくらより跡よりこひのせめくれはとこなかにこそおきゐられけれ

\*傍線部、諸本異同なし。

▼古今集・誹諧歌1023「床中にこそおき居られけれ」元永本。他本「せんかたなみぞ床中にをる」

《備考》元永本の本文と一致する。『俊頼髓腦』所掲の歌形が古写本などの本文であとづけることができる一例。なお、「寝られねば床中にこそ起き居つあとも枕もさだめやはする」（和泉式部統集）も、この古今集歌を「床中にこそおきゐられけれ」の形で認識していたことを窺わせる。

140

やまかつのこけのころもはたゝひとへかさねはうとしいさふたりねん

\*「やまかつの」国・唯・久、「山ふしの」九・鷹（かつい）・池（かついよをいとふ也）内・無、「よをいとふ」口・光・初  
 ▼後撰集・雑三1196（遍昭）、大和物語・百六十八段、小町集35「世をそむく」、遍昭集18「山ふしの」

144

たのめこしことのはいまはかへしてんほとなきみにほとなきみはおきところなし

\*「ほとなきみには」国・略（全）・久、「わか身ふるれば」唯

158

おほかたは月をもめてしこれやこのつもれば人のおひとなること<sup>イモ</sup>

157

あかなくにまたきも月のかくるゝかやまのはにけていれすもあらなん

▼古今集・雑上884(なりひらの朝臣)、伊勢物語・八十二段、古今六帖・一・ぎふのつき327、新撰和歌・四267、業平集56  
 《備考》159番歌参照。前稿Ⅰ・Ⅲ章において言及した。

156

あしひきの山の\*はいてゝ山のはにいてるまで月をなかめつるかな

\*傍線部諸本異同なし

▼後十五番歌合・四番(橋為義朝臣)、玄々集94、三奏本金葉集・恋402、詞花集・雑上298、諸本「きままつ」と

《備考》歌集所掲の本文と一致しない異文。前稿Ⅰ章において言及した。

153

なこりなくちるそめてたき桜花ありてよのなかはてしうければ

\*「なこりなく」諸本異同なし。「はてしうければ」顯・久、「はてのうければ」国、「はてしなければ」略(全)・唯  
 ▼古今集・春下71(よみ人しらず)「のこりなく」(諸本異同なし)

145

人しれずたえなましかはななかへになきなをたとたにいほましものを

\*「わひつつも」略(全)・唯、「なかへに」国・久

▼古今集・恋五810(伊勢)、金玉集・恋43「たえなましかばわびつつも」、

古今六帖・五・人にしらるる2881、新撰和歌・四274、「やみなましかばわびつつも」

《備考》『俊頼髓脳』伝本によって、歌集の本文と一致する歌形と異なる歌形の二通りが伝わる。

▼古今集・雑上879（なりひらの朝臣）、伊勢物語・八十八段、古今六帖・一・さぶのつき330、業平集55

159 てる月をまさきをつなによりつけてあかすわかるゝ人をとゝめん

▼後撰集・雑一1081（河原左大臣）、古今六帖・四・わかれ235「よりかけて」「つながん」

《備考》『後撰集』詞書に拠れば、河原左大臣源融の歌だが、『俊頼髓脳』はこれを惟喬親王に在原業平が詠んだ歌だと解説する。前の157番歌の成立事情と混同してしまったのであろう。前稿Ⅰ・Ⅲ章において言及した。

160 みるからにうとまじきかな月かけのいたらぬさともあらしとおもへは

\*「みながらに」唯、「うとくもあるかな」国

▼古今集・雑上880（紀貫之）「かつみれどうとくもあるかな」、「カツミレハ（トイ）」寛親本、「かつみれば」伊達本、

古今六帖・一・さぶのつき323、貫之集796

《備考》歌集所掲の本文と一致しない異文。前稿Ⅰ章において言及した。

161 しら雲にはねうちかはしとふ雁のかけさへみゆるあきのよの月

\*「かけさへ」顕・久・略（全）、「かすさへ」国・唯

▼古今集・秋上191（よみ人しらす）

「かげさへ」基俊本、筋切本、元永本、関戸本、六条家本、永治本、前田本、天理本、雅経本、建久本。

「かすさへ」雅俗山庄本、静嘉堂本、伝寂蓮筆本、永曆本、昭和切、寂恵本（ヶ貼清）、伊達本。

古今六帖・一・秋の月300「数さへ」、新撰和歌44、和漢朗詠集・月29「かげさへ」

《備考》北村（赤瀬）知子氏は、『俊頼髓脳』の地の文における説が「かげさへ」説であるのに、国では所掲和歌の歌形が「かすさへ」であることに着目し、国の本文に藤原定家説が反映していると推定する根拠の一つとされた。本稿注Ⅰ所掲北村論文参照。

168 しものたて露のぬきこそもろからしやまのにしきのおれはかつちる

\*「もろからし」顯・唯・久、「よはからし」國・初、「うすからし」略(口・光・九・内・鷹・無・池)  
 ▼古今集・秋下291(せきを)「よはからし」私稿本、雅俗山庄本、靜嘉堂本、伝寂蓮筆本、雅經本、永曆本、建久本、伊達本、寂惠本(モノ(貼)俊本ソバニモロツク)。「よわからし」昭和切、永治本、天理本、前田本(ハ(朱))。「もろからし」寸松庵切、筋切本、元永本、基俊本。新撰和歌・174「もろからし」、古今六帖・五・にしき<sup>3516</sup>「もろからし」  
 《備考》略の「うすからし」は、古今集本文と一致しない異文。

171

いはそくたるみのうへのさはらひのもへいつるはるにあひにけるかも

\*「あひにけるかも」顯・國・久、「なりけるかも」口・光・九・内・鷹・池、「なりにけるかな」唯・無・初  
 ▼萬葉集・八1418「成來鳴」、古今六帖・一・む月7、和漢朗詠集・早春15「なりにけるかな」

194

かきくらす心のやみにまとひにきゆめうつとはよひとさためよ

\*「よひと」顯・略(口・無・池・九・内)「よ人」略(鷹)・唯、「こよひ」國

▼伊勢物語・六十九段、古今集・恋三646(なりひらの朝臣)、古今六帖・四・ゆめ<sup>2037</sup>、業平集「よひと」伊勢物語(伝肖柏筆本・時頼本)、古今集(大江切、志賀須賀本、六条本、中山切)、「よ人」伊勢物語(大島本)、古今集(元永本、後鳥羽院本)、「世人」古今集(寂惠本、伊達本)。

「こよひ」伊勢物語(天福本、塗籠本、伝為相筆本、伝悉鎮為家両筆本ほか)古今集(基俊本、雅俗山庄本、寛親本、永治本、前田本、天理本、雅經本、建久本)

《備考》『俊頼髓腦』伝本のうち国だけ「こよひ」。『俊頼髓腦』は地の文によれば「よひと」説なので、国の歌形は後代の本文改変と見られる。181番歌と同様、北村(赤瀬)知子氏は国の本文「こよひ」を定家説の反映とみる。

206

我やとのわたまもいまたかりあけぬにまたきふりぬるはつしくれかな

◇ 《備考》『天禄三年規子内親王前裁歌合』の判詞に見える「我がかどの早稲田の稲も刈らなくにまたきふきぬるがらしの風」から変成



したものか。前稿V章において言及した。

208 ひさかたのはにふのこやにこし雨ふりとこさへぬれぬみにそへわきも

▼萬葉集・十一 2683

209 にをとりのかつしかわせをにえすともそのかなしきをとにたてめやも

\*「かをとりの」唯 「かへすとも」唯

▼萬葉集・十四 3386

《備考》210番歌参照。

210 わかかとのわたたかりあけてにえすともきみかつかひをかへしはやらし

\*「かへすとも」唯(彰)「かへすひも」唯(書・松)

▼古今六帖・二・つかひ1102、家持集229「かへすとも」

《備考》唯は209番歌、210番歌の歌順が逆。また他の『俊頼髓脳』諸本では「にえす」の例としてこの二首を掲げるが、唯の本文は「かへす」という語の注釈というかたちになっている。

217 露のいのちくさのほにこそかゝれるをつきのねすみのあはたゝしきかな

▼高光集34「たのむよか月のねずみのさわぐまのくさばにかかるつゆのいのちは」

綺語抄「露の命草のねにこそやどれるを月のねずみのあわたゝしきかな」、奥義抄

《備考》月の鼠をめぐる語りに伴い、口頭で歌が享受されるなかで生成された歌形か。前稿V章において言及した。

218 くさのねにつゆのいのちのかゝるまをつきのねすみのさはくなるかな

◇

221

《備考》217番歌と並べて掲出された、月の風の説話をめぐる歌。歌集等に先例なく『俊頼髓腦』においてあらわれた歌形。

さゝかにのくものはたてのさはくかな風こそくものいのちなりけれ

\*「さはく」颯・国・久、「うごく」略(全)・唯

▼重之集187「うごくかなかぜをいのちにおもふなるべし」

《備考》『俊頼髓腦』は「重之が、死にたる蜘蛛ののけざまに臥したるを、風の吹きければ生きたるやうに手のはたらきけるを見てよめる歌」としるす。歌の本文が現存『重之集』の歌形とやや異なり、また歌の成立事情についての理解も『重之集』の詞書の記述とずれたところにある。

270

あらたまもてたまもゆらにをるはたのきみかみけしにぬひてかんかも

\*「あらたまも」颯・唯、「あらたまの」略(全)、「あしたまも」国・久

▼萬葉集・十2065、「足玉母」古今六帖・五・はた3253「あしだまも」

290

みつのえのうらしまかこのはこなれやはかなくあけてくやしかるらん

\*久「みつのゑの」、他本傍線部、諸本異同なし。

▼拾遺集・夏122(中務)、拾遺抄・夏81、新撰朗詠集・夏夜144「なつのよは」

《備考》「みづのえのうらしまのこ」という語句への関心に引かれて記述したことによるか。前稿N章において言及した。

292

かひかねをさやにもみしかけら鳴よこをりふせるさやのなかな

\*「くやる」(ふせい)「国」「くやる」久

▼古今集・東歌320「ふせる」志賀須賀本、基俊本、雅俗山庄本、永治本、永曆本(「ヨ」傍記)、寂庵本、伊達本。「くやる」大江切、後鳥羽院本(「よこほりこせる本、ふ本」傍記)、高野切。「こやる」元永本。「くせる」関戸本、六条家本(「ふ」傍記)。「こせる」寛親本、前田本、天理本、雅経本。

298

いさゝめに思し物をたこのうらにさけるふちなみひとへにけり

\*唯、この歌を欠く。「させるふちなみ」久

▼萬葉集・十九420「伊佐左可尔」「開流藤見而」諸本訓に異同なし。綺語抄・上「いささめに」「さけるふちなみ」

300 b

君が世はつきしとそみる秋風やみもすそ河のすまんかきりは

\*「みる」頭・内・鷹・無・池・初、「思ふ」唯・久・口・光・九 「秋風」頭・内・初、「神風」久・略（口・光・九・鷹・無・池）・唯

国、この歌を欠く。

▼後拾遺集・賀450（民部卿経信）「つきじとぞおもふかみ風や」、承暦二年四月二十八日内裏歌合・十四番・祝左27、経信集188 承暦二年内裏歌合・妙法院藏本は「つきしとそおもふ」に「みる」と傍記（堀部正二『纂輯類聚歌合とその研究』図版）。

《備考》第三句、頭・内・初の「秋風」は「神風」の誤写（本稿参照）。第二句、『俊頼髓脳』諸本は「つきじとぞみる」「つきじとぞ思ふ」の両形を伝える。経信詠は『後拾遺集』等により後者の歌形で理解されることが多い。だが、「つきじとぞみる」も承暦二年内裏歌合・妙法院藏本傍記と『俊頼髓脳』に一致して伝わることからみると、古く溯れる本文のようである。なお、この歌については山村孝一氏に指摘がある（平成八年度和歌文学学会大会口頭発表）。

302

はなかたみめならふ人のあまたあれはわすられぬらんかすならぬ身は

\*「はなかたみ」頭・久・唯、「はなかつみ」国・略（全）

▼古今集・恋574（よみ人しらず）「はなかたみ」（諸本異同なし）

古今六帖・五・かたみ346「はなかたみ」「人の」（諸本異同なし）

《備考》本稿で取りあげた。

310

はなちとりつはぎのなきをとふへからにかて雲居をおもひかくらん

「いろの」基俊本、右衛門切、天理本、寛親本、雅経本

322

からころもしたてるひめのしたこひそあめにきこゆるつるならぬねを

321

あままへからのまへをかのくかたちぎよければにこれるたみもかはねすししも

- \* 「あかしの」国、「あまゝへしの」九・内・鷹・無・池「あまくへしの」口・光「あまかくの」唯、「あまかゝの」久  
 ▼延喜六年日本紀竟宴和歌（是忠）「あまかしの」

320

かのみゆるいけへにたてるそかきくさのしかみさえたのいろのてころさ

- \* 「いけへにたてるそかきくさの」顯・九、「いへにたてるそかきくさの」口・光・内・鷹・無・初、「いへにたてるそか菊の」池  
 「いけへにたてるそかきくの」国・久・唯 「しかみさえた」  
 ▼拾遺集・雑秋1120（よみ人しらす）、拾遺抄・雑上448、能因歌枕  
 「いけへにたてるそかきくの」

「しかみさえた」拾遺抄（流布本・宮内庁本・貞和本）、拾遺集（為秀輿書本・為重輿書本・具世筆本、天理本、北野本）  
 「しけみさえた」拾遺集（中院通茂臨模定家自筆本（「しかみ」傍記）

《備考》『俊頼髓腦』掲出和歌の第二・三句の異同は「いけへにたてるそかきくの」から転化した本文の乱れだろう。第四句の「しがみさえた」を『俊頼髓腦』は下枝の意とする。通茂臨模定家自筆本拾遺集の本文「しけみさえた」では、茂みさ枝の意と解される。

319

\*傍線部、諸本異同なし

▼古今六帖・五・になきおもひ 3119 「はなちどり」（岡田真之旧蔵本）「はまちどり」、伊勢集189 「はまちどり」（諸本異同なし）

いへひとはえたもしみゝにかよふともわかまつきみかへりひらぬかも

- \* 「えた」顯・略（全）、「みち」国・久・唯 「きみかへりひらぬかも」顯・九・内・鷹・無・池、「きみはかへりこぬかも」口・光  
 「きみかつかひこぬかも」国・久・唯  
 ▼萬葉集・十一・2529 「路毛」 「使不来鴨」

\*「したこひそ」颯・口・光・内 「したこひに」九・鷹・無・池、「せなこひそ」国・久 「せこなひに」唯  
 ▼延喜六年日本紀竟宴和歌(源当時)「せなこひそ」、奥義抄「つまごひぞ」、新勅撰集・神祇540「つまごひぞ」

324

わかやとをいつならしかならのはのならしかほにはをりにおこする

▼後撰集・雜二1182「いつならしか」、大和物語・六十八段「いつかはきみが」

325

かしいきの葉もりのかみもましけるをしらてそをりしたよりなざるれつら

▼後撰集・雜二1183「ならのはの」、大和物語・六十八段「かしはぎに」、綺語抄・中「ならのはの」

328

思ひきやひなのわかれにをとるへてあまのなはたくあさりせむとは

\*「あさり」颯・久・唯・略(口・光・九・内・無・池)、「いさり」鷹、「(いイ) (あミセケチ) さり」国  
 ▼古今集・雜下961(たかむらの朝臣)「いさり」諸本異同なし。

古今六帖・四・わかれ230 書院部本「あ(いイ)さり」、他本「いさり」、新撰和歌・四235「いさり」  
 《備考》『古今集』『古今六帖』は「いさり」だが、『俊頼髓腦』所収和歌は「あさり」。「あさり」と「いさり」は本来的には別語だが、その語義用法には混乱を生じていたらしい。鴨長明『無名抄』の「あさりいさり差別事」の項には、『あさり』といひ、『いさり』いふは同事なり。それに取りて朝にするをば『あさり』と名付け、夕にするをば『いさり』といへる、是あづまの海士の口状なり」という説が見える。

332

たひにしてものこひしきに山もとのあけのそはふねぎしにこぎ行

\*「きしにこぎゆく」颯・略(全)、「おきにこぎゆく」国・唯、「おきにこぎ□□」久

▼萬葉集・三270「奥榜所見」 広瀬本「オキニコキユク」を消し「コクミュ」。他本「おきにくくみゆ」  
 袖中抄、続古今集「おきにくくみゆ」

334

おきにくくあからをふねにつとやらんわかき人みてときあけむかも

\* 「おきにくく」顯・略(全) 「おきゆくや」國・唯・久

▼萬葉集・十六 3868 「奥去哉」袖中抄「オキユクヤ」

335

さきもりのほりにこきいつるいつて舟かちとるまなくこひやわたらむ

\* 「こひやわたらむ」顯・略(全)、「恋はしげけん」國・久 「こひはしげからん」唯

▼萬葉集・二十 4336 「戀波思氣家牟、奥義抄、袖中抄「こひはしげけん」、和歌童蒙抄「こひはしてまし」

336

いりえこくたなをしをふねこきかへりをなし人もこふる比哉

\* 「いりえ」顯・久・略(全)、「ほりえ」國・唯 「こふるころかな」顯・久・略(全) 「こひわたるかな」國

▼古今集・恋四・732 「いりえ」唐紙卷子本、御家切。他本「ほりえ」 「こひわたるらし」基俊本、他本「こひわたらむ」

338

あやしくも袖にみなとのきはくかなもろこしふねもよせつばかりに

\* 傍線部諸本異同なし。

▼伊勢物語・二十六段「おもほえず」、新古今集・恋五 1358 (よみ人しらず) 「おもほえず」

《備考》『俊頼髓腦』において歌集の本文と一致しない歌形が現れる事例の一つ。前稿冒頭において言及した。

341

あまの河あさせしらなみたとりつゝわたりはてねはあけそしにける

\* 傍線部諸本異同なし。

▼古今集・秋上 177 (とものり) 「わたりはてねは」。寂庵本・永治本・前田本・天理本の傍記に「伊勢大輔自筆本」は「わたりはつれは」とある。古今六帖・一・七日の夜 159

《備考》『俊頼髓腦』は「もし古今のかきあやまりかと思ひて、あまたの本のよきとおぼしきをかりあつめてみれば(以下略)」とある

ように、複数の『古今集』伝本を見て本文の検討を試みたとする。前稿Ⅳ章において言及した。

ぬれてはず山ちのきくの露のまにかてかわれはちよをへにけん

- ▼古今集・秋下273 (素性法師)「いつかちとせを」、寛平御時菊合17、新撰和歌・一94「いかでちとせを」  
古今六帖・六・きく3730「いかでかわれは」と漢朗詠集・仙家553

359

心をしふかうのさとにおきたえはこやの松をはゆきてみてまし

- ▼萬葉集・十六3851、古今六帖・四・ぎふの思2157

360

わきもこかくへきよひなりさゝかにのくものふるまひかねてしるしも

- \*「わきもこか」顯・國・久・略(口)「わかせこかい」と傍記、「わかせこか」唯

▼古今集・墨滅歌110、古今集・仮名序、古今六帖・五・わがせこ3099、日本書紀・允恭天皇八年「わがせこが」  
顯注密勘抄「わきもこか」

《備考》唯のみ『古今集』と一致する歌形。前稿V章および本稿において言及した。

365

つきよみころもしてうつこゑきてはいそかぬ人もねられさりけり

- \*略(全) この歌を欠く。顯・國・久・唯この歌あり。

▼後拾遺集・秋下336 (伊勢大輔、永承四年内裏歌合・十番掃衣右20、後六々撰「さよふけて」、綺語抄「月よみ」)  
《備考》『後拾遺集』の本文と異なる。『綺語抄』も『俊賴髓腦』と同形の歌を伝える。前稿V章において言及した。

414

あひみぬもうきもつらきもから衣思ひしらすもとくるひもかな

- \*「うきもつらきも」顯・略(全)、「うきもわかみの」國・久・唯

▼古今集・恋五808 (いなば)「うきもわが身の」、新撰和歌・四336「うきもわが身の」  
《備考》國・久・唯は『古今集』と同形の「うきもわが身の」。本稿で取りあげた。

422

しぬくときくくたにもあひみねはいのちをなにのたにかのこさむ

\*「いつのたにかのこさん」国・久「なにのたにかのこさむ」顯・略（口・光・九・内・無・池）・唯

「なにのためかのこさむ」鷹、「なにの爲にのこさむ」初

▼後撰集・恋三708（源信明）「いつのよにかのこさん」天福本、中院本、貞応二年本。「いつのたにかのこさむ」堀河本。

古今六帖・四・さぶの思256「いつたにかのこさん」書陵部本、他本「いつのためかのこらん」。

信明集91「いつのために（よにか）のこさん」

426

おもひやれわかれしのへをきてみればあさちかはらにあきかせそふく

\*「おもひやれ」顯・略（全）、「おもひかね」国・久・唯

▼道濟集、三奏本金葉集・秋165（源道濟）、新撰朗詠集・詠史683「おもひかね」、玄々集115「おもひわび」

431

あらたまのとしのやとせをまぢわひてたよひこそにあまくらすれ

\*「あらたまの」顯・略（全）・唯、「むは玉の」国・久、「やとせ」顯・国・久・略（口・光・九・内・鷹・無・池）、

「みとせ」唯・初

▼伊勢物語・二十四段「あらたまの」「みとせ」（諸本異同なし）

《備考》唯・初の「みとせ」は後の書写者が『伊勢物語』に適合する形に改訂した本文か。本稿で取りあげた。

（補記）『俊頼髓脳』所掲の萬葉歌については、当時の訓や俊頼の和歌実作における萬葉語の受容とも関わらせて改めて考える必要があると感じている。ここでは『俊頼髓脳』諸本における異同を示すに留め、備考は加えなかった。

（おかげさき・まきこ） 成城大学大学院博士課程後期